東南アジア研究　34巻1号　1996年6月

民族主義者イワ・クスマ・スマントリの政治的肖像

後　藤　乾　一*

A Political Portrait of Iwa Kusuma Sumantri

Kenichi GOTO*

Although Iwa (1899 ~ 1971) is one of the well-known nationalist leaders in 20th century Indonesia, his thoughts and actions have not received due attention in contemporary Indonesian studies.

As a son of Sundanese aristocratic family (*menak*) he was expected by his parents to become an official of the Dutch colonial government. However, he refused to become one of the "indigeneous elites" who supported the colonial system from the below. During his stay in the Netherlands in the early 1920s, he was elected as chairman of *Perhimpunan Indonesia* and contributed greatly to making the organization more nationalistic. Furthermore, upon obtaining a law degree, he moved to Moscow in order to combine the nationalist movement and the international communist movement. Among the top nationalist leaders of his generation, he is exceptional in having such an experience. Due to his political background, the colonial government in Batavia arrested him in 1929 and soon exiled him to Bandaneira Island, where he was forced to spend about 10 years until the early 1940s.

From independence in August 1945 until his death in 1971, he held three cabinet posts, but at the same time he also had a number of bitter experiences, including two years of imprisonment for his connection to the "July Third Affair" of 1946, as well as being forced to resign as Defense Minister under political pressure from the army. He strongly insisted that the armed forces should be an instrument of the state and opposed the concentration of power in the armed forces. He also insisted that such a culturally diverse country as Indonesia should have a political system whereby each ethnic group could develop its own culture and identity. He believed that this was more desirable than strengthening of unification from the center, in order to bring real unity to the country.

When we look at the Indonesian political situation in 1990s, Iwa's arguments concerning the politico-military relationship and the coexistence of nationality and ethnicity still appear pertinent.

はじめに

イワ・クスマ・スマントリ Iwa Kusuma Sumantri は，20世紀を目睫にした1899年5月，西部ジャワ，プリアンガン州の一隅に，スンダ人貴族(メナック)の子として生まれた。その年は，蘭領東

* 早稲田大学社会科学研究所； Institute of Social Sciences, Waseda University, 1-6-1, Nishiwaseda Shinjuku-ku, Tokyo 169, Japan

インド（現インドネシア）の宗主国オランダにおいて，永年植民地官僚をつとめた下院議員ファン・デフェンテル Van Deventer が「倫理政策」の出発点となった有名な論文「名誉の負債」を発表し，大きな衝撃を与えていた。倫理政策が「原住民上層」階級の子弟に西欧的教育を施し，それによって蘭領東インドの「平和と安寧」を下支えする新エリートの創出を主眼としたことを考慮するならば，やがてライデン大学に留学し，さらにはモスクワにも学ぶことになるイワは，文字どおり倫理政策の申し子ともいえる存在であった。だがその申し子は，同時代の多くの仲間――スカルノ Sukarno，ハッタ Mohammad Hatta，スバルジョ Ahmad Subardjo，アリ・サストロアミジョヨ Ali Sastroamidjojo，スタン・シャフリル Soetan Sjahrir ら――と同じく，植民地秩序の末端を担うことを拒否し，「インドネシア」という新たな「共同体」創出の担い手となったという意味で，倫理政策の鬼子でもあった。

この小論は，1910年代の民族主義運動の黎明期から1965年「9月30日事件」を契機とする未曾有の政治的混迷に至る半世紀余を，主体的な行為者として，また醒めた観察者として生きた一人のナショナリスト＝知識人イワ・クスマ・スマントリの政治的・思想的軌跡を跡づけつつ，（1）インドネシア民族主義運動史における主要な課題であった「ナショナリズムとインターナショナリズム」がどのような形で彼の内に内面化されていたか，そして（2）戦後の政治過程のなかで重要な争点となった政軍関係および中央・地方関係について彼がいかなる認識を抱いていたか，を考察するものである。

研究史的にみるならば，イワには死（1971年11月27日）の直前に完筆した『自伝』をはじめ数多くの著作[1)]があり，また内外の主要なインドネシア近現代史研究のなかでつねにその名に言及されるものの，彼についての学問的位置づけは今日なお必ずしも十分にはなされていないのが実情である。共産主義に対しきわめて峻厳な立場をとる今日のインドネシアにおいても，かつて国際共産主義運動と深く関わったイワ・クスマ・スマントリの政治的経歴にもよるのであろうか，民族主義運動史における主要なアクターの一人であるにもかかわらず，彼に対する歴史学的な考察はほとんど未着手に近い状況である。

1）単著の形での著作は以下のとおりである。*Peasant's Movement in Indonesia.* Moscow, 1927; *Ilmu Hukum dan Keadilan*（法学と正義）. Jakarta: Penerbitan Jakarta, 1950; *Revolusionisasi Hukum Indonesia*（インドネシア法革命化の諸問題）. Jakarta: Penerbitan Universitas, 1958; *Kearah Perumusan Konstitusi Baru*（新憲法論）. Jakarta: Penerbitan Universitas, 1958（edsi ke. II, 1968）; *Sejarah Revolusi Nasional*（民族革命史）Jilid I～III. Jakarta: Penerbitan Universitas, 1963–1965; *Pengantar Ilmu Politik*（政治学入門）. Jakarta: Penerbitan Universitas, 1966; *Pokok-pokok Ilmu Politik dan Ringkasan Pemberontakan Gestapu/PKI*（政治学の基本問題と9月30日共産党蜂起の概略）. Jakarta: Penerbitan Universitas, 1967; *Autobiography dari Prof. Iwa Kusuma Sumantri*（イワ・クスマ・スマントリ教授自伝）stencil, 1971. 邦訳（後藤乾一訳）『インドネシア民族主義の源流――イワ・クスマ・スマントリ自伝』早稲田大学出版部. 1975.

I　青少年時代（1915 ～ 1941 年）

イワ・クスマ・スマントリ（以下インドネシアでの通称たるイワと記す）の政治的肖像を描くに際し，まずその生涯を幼少年期（1899 ～ 1914 年），青年期（1915 ～ 1941 年），壮年期（1942 ～ 1965 年），晩年（1966 ～ 1971 年）の四期に分けておきたい。その節目を画する三つの時点は，政治史的にみるならば，それぞれ第一次世界大戦，太平洋戦争の勃発，そして「9 月 30 日事件」の発生した年であり，そのいずれもが爾後のイワの政治的，思想的境涯に少なからぬ影響を与えることとなる。

インドネシア民族主義思想の研究者土屋健治は，ナショナリストの誕生とは「新しい〈旅〉を始める人々が誕生したことを意味」するものだと指摘する。土屋によれば，その旅とは，空間的な移動を行うこと，宗主国の言語の修習により新しい世界を追究すること，そして教育制度の位階を昇り植民地の中心，さらには宗主国へと留学する旅として描かれる［土屋 1990：157–159］。その意味では，プリアンガン東部の小都邑チアミス町→州都バンドン→首都バタヴィア（現ジャカルタ）への空間的移動を若くして終え，また少年時代からオランダ人家庭教師の下でオランダ語の手ほどきを受け，さらにはその二つの旅の延長線上できわめて自然な形でオランダ留学を果たしえたイワは，まさに蘭領東インドが産んだ典型的な植民地ナショナリストであった。

1．民族主義思想の塑像

スンダ社会の伝統的貴族[2]であり，蘭印政庁の原住民教育官僚であった父と母のもとで，物質的には何らの不自由なく「むせかえるような幸福感と自由」［イワ 1975：9］を享受していたイワにとって，OSVIA（原住民官吏養成学校）への入学は，いわば既定の道筋であった。同校を卒業し植民地官僚システムの中へ参入することは，1910 年代のパックス・ネーエルランディカの下では「原住民社会」に開かれた最も安定したコースであった。しかしながら，スンダ社会の封建貴族子弟のための学校であったバンドンの OSVIA を自らの意志で一年で中退したことは，イワがその時点で――たとえ明確な意識はなかったにせよ――オランダが掲げた倫理政策の理念と目標を否定したことを意味した。

スンダ社会の“母なる都”バンドンを離れたイワは，ジャワのみならず蘭領東インド各地から多かれ少なかれ似たような社会的背景をもつ青年たちが集うバタヴィア法学校に入学する。ここで学んだ法律学は終生イワが知的情熱を傾けた学問となっただけでなく，その後の民族主

2）　メナックに関する日本語文献として田中［1972：409–421］を参照。

義運動という実践の場における理論的武器ともなった。

イワがバタヴィア法学校に在学した1916～1921年は，社会主義ソ連の誕生と国際共産主義運動の開始，民族自決思想とそれに基づく民族運動の高揚が世界各地でみられ，植民地秩序に素朴な懐疑を抱き始めた若き「原住民」知識人に大きな思想的影響を与えていた。そうした中で，イワが最初に関わりをもった政治的社会的組織がトリコロダルモ Tri Koro Darmo（三聖会，のちヨング・ヤーファと改称）であったことは注目される。[3)]

当時のジャワではブディ・ウトモ Budi Utomo（1908年設立），パグユバン・パスンダン Paguyuban Pasundan（1914年設立）というそれぞれジャワ人，スンダン人社会に基盤をおく結社が有力であった。そうした中でヨング・ヤーファ（ジャワ青年団）は，その名が示すごとく青年トルコ党の動きに刺激を受けつつ結成され，原理的にはジャワ在住のすべてのエスニック集団（主にジャワ人，スンダ人，マドゥラ人，バリ人）に門戸を開いていた。いわば「大ジャワ主義」の立場をとるヨング・ヤーファは，その後の各地域の青年運動にも大きな影響を与え，さらには1928年の第二回全国青年会議における「青年の誓い」[4)] を産み出す先駆となったという意味で，「大インドネシア」思想の原基を形成したとみることもできよう。そうしたヨング・ヤーファの書記長に選出されたイワは，『自伝』においても，そこでの経験は「政治的な統一を獲得し，民族精神をさらに深め，不幸な被抑圧人民との連帯感を深め」る上での好機であったと想起している［同上書：18］。

なおイワはスンダ社会に基盤をおくパグユバン・パスンダンとは直接的な関わりをもたなかったものの，この結社が志向したエスニシティとナショナリティの両立は，晩年のイワの思想とも相通じる点もあるので，ここで軽く言及しておきたい。1914年9月，ブディ・ウトモを退会したスンダ知識青年の手で創られたパグユバン・パスンダンは，1920年の党大会において，スンダ人としてのアイデンティティの重要性を再確認しつつも，蘭領東インド各地の他の諸種族とも政治的連帯を求める，いわば「種族民族主義」を基本理念として掲げた。さらに1931年の党大会では，より明確にエスニシティとナショナリティの調和と両立を目指す立場から次のような党「政治原則」を採択した［Kementerian Penerangan 1954：239］。（1）各種族が各々の種族的，文化的個性を維持する権利を承認する。（2）すべてのインドネシア民族は共通の運命で結ばれていることに鑑み，他の諸種族と協力して政治闘争を推進する。（3）民族主義政党間の合併からは，望ましい成果を期待しえない。（4）インドネシアの統一の強化を重視し，政治的な統一戦線の組織化に努力する。

3）1910年代の各地のエスニック集団を基盤にした「民族主義」運動については A. K. Pringgodigdo［1949］を参照。

4）「唯一の祖国としてのインドネシア，唯一の民族としてのインドネシア民族，唯一の言語としてのインドネシア語」を確認，採択した決議。

端的にいうならば，パグユバン・パスンダンは「種族原理」に立脚した「民族主義」政党という基本的性格を有するものであった。しかしながら，当時の青年イワにとっては，エスニシティや地域性をより重視するとみなしたパグユバン・パスンダンは，さほど吸引力があるものとは映らず，むしろオランダ留学を契機に彼のナショナリズムはインターナショナリズムとも接点を求める，より急進的な方向を志向するようになる。

2．オランダ留学

1922年5月，イワは植民地の知識青年にとって憧憬の学府たるライデン大学法学部留学の途に上る。後のインドネシア国民党委員長サルトノ Sartono と同船であり，またこの年モハマッド・ハッタもロッテルダム商科大学に学ぶことになる。これら第一次世界大戦後に宗主国に留学した青年は，一世代前と異なり，その多くがヨング・ヤーファ，青年スマトラ同盟等で一定の政治的体験をつんでいたのが特徴である［永積 1980：234］。イワは約3年という最短距離で法学修士（ミースステル）の学位と蘭領東インドでの弁護士資格を獲得する。学位取得の年数は同世代の俊秀たとえばハッタの11年，サルトノの4年，スバルジョの14年と比較しても異例の早さであった。しかしながら，オランダ留学でイワが手に入れた最大の成果は，エリートへの登龍門のパスポートではなく，留学生会インドネシア協会員としての二つの政治的体験，即ち協会会長に選出されたことおよび国際共産主義運動との関わりであった。

留学2年目の1月，留学生会会長に選出されたイワの下で組織名が東インド協会 Indische Vereniging から同じオランダ語を用いたものであったがインドネシア協会 Indonesische Vereniging へと改称される。蘭領東インド各地から宗主国に学んだエリート青年の間で，故国の将来の「あるべき」政治的エンティティを「インドネシア」という概念に求めたことを象徴的に示したものであった。この動きは1925年2月（会長スキマン・ウィルヨサンジョヨ Sukiman Wirjosandjojo）に組織名がオランダ語からインドネシア語表示へ（Perhimpunan Indonesia）と変更されたことにより，さらに加速される［同上書：235］。

1923年1月のインドネシア協会総会で会長に推されたイワは，民族自決とそのための自助努力，団結の強化を提起し［イワ 1975：32］，1927年（インドネシア国民党結成）以降の民族主義運動の基本的方向を示唆することになった。当時会計担当の協会役員であったハッタは，新綱領を説明するイワが「それぞれの民族は自決権をもつというウィルソン Wilson 大統領の言葉が政治の世界で実行されるまでは，非協力主義に基礎を置くことがインドネシアにとって最善である。オランダとの協力を拒否して，インドネシアは民族の力を建設するために努力するのだ」と強調したことを書き留めている［ハッタ 1993：160］。ここでイワが「民族（バンサ）」という語を用いる時，それは彼の出自たるスンダ族を意味するのではなく，蘭領東インドの各エスニック集団（種族）の団結によってのみ成立可能な「インドネシア」という民族を指すことはいう

までもない。[5)]

インドネシア語を民族の言語として前面に押し出した1925年，インドネシア協会はより急進的な民族主義を掲げた「新綱領」を採択した。その背景には1923年5月のジャワにおけるVSTP（鉄道電車職員組合）のストライキを指導した廉でオランダに放逐されたインドネシア共産党（1920年創立）初代委員長セマウン Semaun が，留学中のインドネシア人学生に大きな政治的，思想的影響を与えていたことも一因としてあった。その「新綱領」とは，次のような内容をもつものであった［イワ 1975：34］。

（1） インドネシア民族は，各種族間の分裂を克服して，初めて，植民地主義権力を打倒することができる。その目的達成のためには，自覚した大衆行動を組織し，自己の力に依存するという原則が樹立されなければならない。

（2） 独立目的達成のためには，インドネシア人民各層の闘争参加が絶対条件である。

（3） 植民地社会におけるもっとも重要で本質的な政治問題は，植民地主義的な抑圧者と被抑圧者との間に常に存在している矛盾である。植民地主義者とその被抑圧者の間にある，この矛盾をおおいかくし，また，あいまいにしてゆこうとする植民地主義的な抑圧者の政策に対決し，私たちは，その諸矛盾を明らかにし，発展させてゆかなければならない。

（4） 植民地主義的な抑圧者は，インドネシア民族の生活と道徳を破壊してきた。従って，私たちは，精神面と肉体面の健全化の努力を強力に推進する必要がある。

この「新綱領」では，「インドネシア民族」とオランダ植民地支配の間の根本的矛盾が鋭くえぐられると共に，マルクス主義的な歴史解釈をふまえた運動方針が提示され，民族主義運動との連携を重視しつつあったコミンテルンの影響の大きさを物語っている。共産主義者セマウンと留学生会に結集する青年民族主義者たちの接点に立ったのがイワであることは，彼自ら『自伝』の中で示唆している。また1924年4月に刊行された留学生会創立15周年記念の論文集の中で，イワが「東方における共産主義の影響」と題した一文を寄稿していることも示唆的である［ハッタ 1993：171–172］。

3．モスクワ滞在

留学生会の指導層の中でセマウンと最も個人的関係が深かったイワ[6)]は，協会会長ブディヤ

5）「バンサ bangsa」を「国民」，「スク・バンサ」を「民族」と訳出する場合もあるが（たとえば土屋［1990：総説］），本稿では前者を民族，後者を種族（ethnic group）として使用する。

6）後述するように独立後国立バジャジャラン大学（在バンドン市）の初代総長となったイワは，セマウンに名誉博士号を授与している。また共にモスクワ滞在中ロシア女性と結婚し一児をもうけていることも，両者が晩年に至るまで親交を結んだ理由の一つであると思われる。

ルト Budijarto，書記長ハッタの委任状を手に学位取得直後の 1925 年 10 月，セマウンと共にモスクワに赴くことになる。丸 2 年間のモスクワ生活を過ごす中でイワは，その地の冬の苛烈さに苦しみつつ，極東共産主義大学において『資本論』をテキストとしてマルクス主義を学習し，また民族主義と共産主義の提携の可能性を模索した。しかしながらプリアンガンの豊饒な緑野の中で幼少年期を送り，さらに西欧市民社会の経済的繁栄と政治的自由の洗礼を受けていたイワは，私生活ではロシア女性アンナとの結婚生活（一女をもうける）等生涯忘れ得ぬ思い出も残したものの，理想とかけ離れた共産主義社会の現実に対し次第に懐疑的になっていく。こうして爾後のイワはマルクス主義的な歴史解釈や運動理論を自らの政治闘争の武器とすることはあっても，共産主義とは一線を画した道筋に入っていくことになる。とはいうものの，コミンテルンとの関わりで 2 年間のモスクワ生活を送ったという特異な体験は，後述するように独立後政府の要職に就いたイワに対する，政敵からの「赤いイワ」批判となって，しばしば彼を苦境に立たせたことも事実であった。

ところで極東共産主義大学で学びかつ後には「インドネシア問題」につき教鞭をとるかたわら，ソ連滞在中のイワは，二つの注目に価する活動を行なった。その一つは，モスクワに送られてきた五人のインドネシア人船員への学習手助けである。この点につき『自伝』でイワは，「船舶労働者としてのその労働における苦しみが原因となっているのか，あるいはコミンテルンの統一戦線政策にひきつけられてか，その船員たちは，はるばるとこのモスクワまでやって来たのである」とごく表面的な記述を残すだけである［イワ 1975：48］。

しかしながら，インドネシア共産党に関する R・マクヴェイ McVey の古典的研究，[7] さらには増田与や永積昭らの指摘にみるように，五船員のモスクワ入りは，極東諸国の労働運動の連帯強化を重視し，早くから海員の組織化に注目していた赤色労組インターナショナル（プロフィンテルン）など国際共産主義運動のネットワークの中で計画的になされたものであった。なお 1924 年 6 月には，広東でプロフィンテルンの主催で「太平洋運輸労働者会議」が開催されていることも注目すべきであろう［永積 1979：81］。その間の具体的経緯を詳細に把握していたか否かは別として，イワはその網の目の切り結ぶ地点にいたわけである。その五船員は，留学生会会長時代のイワの協力を得つつセマウンがアムステルダムに結成した東インド海員組合（SPLI）の「原住民下級船員を共産運動に呼び込む」方針の一環として送られてきたのであった［増田 1971：69］。当時蘭印政庁による厳しい弾圧，監視下にあったインドネシア共産党にとって，下級海員の労働組織は国外の党指導者やコミンテルンとの連絡ルートとして重要な役割をもつものであった。

五人の船員の一人ダニエル・カム Daniel Kamu（北スラウェシ出身）に対する蘭印政庁の訊

7） McVey［1965］を参照。

問（1929年5月）によれば，彼らはホラント＝アメリカ汽船会社の船員としてロッテルダムに寄港した1924年末，セマウンの訪問を受けてその説得によりクートペーに学ぶことになった。そして訊問に対し，カムはセマウンから自分たちに与えられた任務は，「東インドに大きな共産党を創出するように，またもしそのような党がまだ残存するならば，その党を拡大するために積極的に協力するように」［永積 1979：70–71］ということであったと陳述している。

しかしながら，そうしたセマウン，さらには彼が属するプロフィンテルンの工作意図にもかかわらず，蘭領東インドにおいて政庁の弾圧政策に抗し党勢を拡大するという任務はきわめて困難であり，とりわけ1926年末の共産党蜂起の失敗後は事実上不可能に近かった。なお，カムは訊問に対しモスクワ滞在中セマウンの指導を受けていたことは繰り返し認めているが，イワの名への言及はなく，また蘭印当局の側からもイワの名を出すことはなかった。この訊問記録を紹介した永積昭は，「［カム供述で］イワのことが一切触れられていないが，敢て彼についての言及を避けたのだろう」と指摘している［同上書：84］。いずれにせよ，帰国し北スマトラ，メダンにあったイワが政庁当局により逮捕されるのは，カム訊問4カ月後の1929年9月のことであった。

国際共産主義運動との関連におけるイワのもう一つの仕事は，モスクワ滞在中の1926年，国際農民同盟（クリスティルン，1923年10月設立）の求めに応じ『インドネシアの農民運動』（フランス語で書かれ，すぐ英，露語訳が刊行）を執筆したことである（筆名 Sinawi Dingli, 公刊は1927年）。イワのこの処女作のもつ意味について筆者はかつて論述したことがあるが，その要旨は以下のとおりである［イワ 1975：366–367（訳者あとがき）］。

一，コミンテルンの掲げる労働者・農民階級を中核とする統一戦線理論を是認する立場から，当時のインドネシア共産党がサルジョノ Sardjono，アリミン Alimin，ムソ Muso らの下で急ピッチで進めていた武装蜂起路線を「左翼偏向」であり，「人民主義的（ナロードニーキ）」な偏向を冒していると批判していること。[8)]

二，今後のインドネシアの民族主義運動を展望する中で，1910年代央の最大政治勢力イスラム同盟をもはや民衆を指導する能力を持ち合わせていないと批判する。それは H. O. S. チョクロアミノト Tjokroaminoto，アグス・サリム Agus Salim ら改良主義に立つ指導部が，セマウン（共産党員だがイスラム同盟にも加入—筆者）らの革命的活動家を追放したからだとする。イスラム同盟に代わり農村部の篤信のムスリム農民を組織化できるのはムハマディア Muhammadiyah（1912年成立）であり，この組織を革命化する目的でムハマディアへの浸透をはかることが（かつてのイスラム同盟に対して行なったように）重要な課題である。

8）後年，この立場から執筆された共産党関係者の著作として Sudijono Djojoprajitno［1962］が興味深い。

三，だが今後の革命的な民族主義運動の担い手として最も期待がもてるのは，ブディ・ウトモである。ブディ・ウトモは，穏健なジャワ人下級貴族の団体であるが近年改良主義を克服しつつあるので（とくに1926年ソロ大会以降），共産主義者が中核となり，ブディ・ウトモの中へ大衆を引き入れ，明確な民族民主主義的な綱領をもった組織にこれを再編成していくべきである。（ただしこうしたイワの主張に対し，イワ著作の監修者であるクリスティルンのT．ドムバールは，イワの統一戦線方式を評価しつつも「植民地政庁に対し半ば協調主義的」なブディ・ウトモに過度の期待をかけることは誤りであると手厳しく批判している。）

ドムバールが指摘したように，その後の民族主義運動史の中でブディ・ウトモは，イワが期待したような革命的民族主義を志向することはなかった。[9] しかしながら，「革命的知識人」を核とする民族主義運動に指導される民族革命の推進というイワの基本戦略は，彼が帰国した1927年7月，すでに帰国していたサルトノら留学生会出身の知的エリートとジャワでの民族主義運動の頂点にあったスカルノらとの提携の中から誕生したインドネシア国民党（当初名はインドネシア国民同盟）において実現したとみることが可能である。明確に「インドネシア独立」を党是とし，宗教とは一線を画した民族主義を標榜したこの組織の成立は，彼（東インド）と我（オランダ）の連合（アソシエーション）を構想した倫理政策の破綻を象徴するものでもあった。そして留学生会名の地域呼称を「東インド」から「インドネシア」に変更し統一戦線における革命的知識人の役割を重視したイワが，1927年11月帰国するやただちにインドネシア国民党に入党したことは，イワもまた「新時代の子」であることを如実に示すものであった。

4．逮捕，そして流刑

5年余に及ぶオランダ，ソ連での留学生活を終えたイワは，帰国直後バンドンで弁護士活動をしながらインドネシア国民党の活動へ関わっていたが，1928年2月には大規模農園が多く労働争議の多発する北スマトラの大都市メダンに移る。[10] ここでのイワは国民党スマトラ支部を指導する一方，インドネシア運転手組合などの労働組合を組織するなどの実践活動に取り組んでいる。さらには日刊誌『マタハリ・インドネシア Matahari Indonesia』を主宰し，筆名で「嘘の約束」「空言」などオランダ批判の論陣をはっていた。このような精力的な政治・言論活動を行なうイワに対し，蘭印政庁は彼を「メダンで人民を動員する任務をモスクワから授けられている共産主義者」［イワ 1975：76］とみなし，1929年9月に逮捕，投獄する。同年12月に

9） ブディ・ウトモの設立・発展過程についてはNagazumi［1972］を参照。

10） イワに先立つ10年前，オランダ留学から帰国した直後のタン・マラカは，ここメダンで民族主義者としての第一歩をしるしたが，このスマトラ屈指の大都会を「資本家にとっては黄金の地，地上の楽園，労働者にとっては汗と涙，死の地獄」であったと描写している［Tan Malaka 1947：47］。またイワは，メダンのタマン・シスワ学校の顧問になるよう要請も受けている［土屋 1982：197］。

は「1930年のインドネシア国民党大反乱」企図の廉でスカルノら同党幹部四人が逮捕されるが，イワのいち早い逮捕も，そうした蘭印当局の国民党への警戒の強さを反映したものであった。

イワにとっては生涯最初の獄中体験であったが10カ月後の1930年7月，バンダ海に浮かぶ孤島バンダネイラ島へ妻ともども流刑されることになり，この地で1941年2月マカッサルに移されるまでの10年7カ月を政治犯として過ごすことになる。バンダネイラには10歳年長の民族主義者チプト・マングンクスモ Tjipto Mangunkusumo がすでに流刑（1928年12月）されていたが，イワと同世代のエリート民族主義者と比較し，イワの10年余の流罪は異例なほど長期であった。インドネシア国民党の誕生を重大な脅威とみた蘭印政庁にとっては，モスクワ帰りの理論家イワの動静はより一層不気味な存在と映じたのではなかろうか。

流刑地でのイワの日常生活や思索，信仰については『自伝』でも具体的に綴られ，また蘭領ニューギニア（現イリアン・ジャヤ）からバンダネイラに流刑地が変更となったハッタやシャフリルの著作からもその一端がうかがわれる［ハッタ 1993：392；Sjahrir 1949：passim］。これらの文献からは，同じオランダ留学組でかつ流刑地を同じくしながらも，イワと西欧社会民主主義への傾斜の強いミナンカバウ出身のこの2人との間には気質的にも政治思想的にも明白な差異を見出すことができる。1945年の独立宣言をめぐる解釈方法，1946年「7月3日事件」[11] におけるハッタ副大統領，シャフリル首相によるイワらの「政敵」逮捕，さらには1959年のスカルノ大統領による45年憲法復帰をめぐっても，イワとハッタらの間には大きな距離があったが，その遠因の一つに流刑期間中の両者の確執［Mrázek 1994：180］があったこともあげられよう。

両者の不協和音の具体的な事例――それは政治的立場の差異を反映したものでもあるが――として，第二次世界大戦勃発後の彼らの相互イメージの対称性をみておきたい。イワは，思想的系譜を同じくするチプト，ハッタ，シャフリルらが政庁により流刑を解かれたのは彼らが今次大戦を「民主主義に対するファシズムの挑戦」と捉え，現時点では抗蘭民族主義運動を一時棚上げし本質的には民主主義国だとみなしたオランダと提携することを唱えたからだとみるのであった［イワ 1975：90］。それに対しハッタは，イワが1941年2月マカッサルへの移動を認められたことを「どうしてイワ・クスマ・スマントリが移監されたか，私は全く知らない。別の場所に（バンダネイラ島から―引用者）移されたいとは時々私に話したことがあった。たぶん，彼がジャカルタにいる誰かに手を回した結果，収監されることになったのだろう」［ハッタ 1993：407］といささか冷ややかな筆致で叙述するのであった。

11）この事件はイワにとっては大きな衝撃であり『自伝』においても約40頁を費し「痛恨」の筆致で綴っている。事件全体の経緯については Anderson［1972］を参照。

この一見些細なエピソードが示すように，第二次世界大戦前夜のヨーロッパ情勢の危機，そしてアジア太平洋地域における日本と欧米列強の間の緊張の高まりの報は，バンダネイラの流刑地にも確実に達していた。こうした中でシャフリルは，1939年8月24日付のイワ宛て書簡において，民族主義運動と蘭印当局が共通の目的＝ファシズムの脅威への対処に向け共同歩調をとるべきこと，そしてその一環としてオランダ側に責任の一部を人民の運動に委譲すべきことを要請する書簡を書くよう協力を求めている［Mrázek 1994：201］。

またハッタは太平洋戦争の勃発直後の1941年12月末，バンダネイラから有力紙『プマンダンガン Pemandangan』へ「太平洋戦争とインドネシア人民」と題した政治論文を寄稿し，その中で「ファシズムが戸口まで近付いている」現在，「インドネシア人民にとって，とるべき立場は日本帝国主義との対決以外にはない」と説き，あくまでも「西欧デモクラシーの陣営に加わって闘う」べきだと訴えていた［Hatta 1953：144］。[12)]

ハッタ，シャフリルの場合と異なり，イワには開戦前夜に書いた政治論文や書簡等の記録は残っていない。そのため当時のイワの時局認識や個人的心境がいかなるものであったかは定かではないが，『自伝』においてチプトやハッタの行動を「親オランダ的な姿勢」だと批判しつつ「私は，傲慢にインドネシア民族を見下しているオランダに連帯することは出来ず，さりとてドイツの侵略活動を承認することも出来なかった」と手短かに述べるにとどまっている［イワ 1975：90］。だがその一方，イワはM. H. タムリン Thamrin ら親日的な民族主義者の一部にあった対日接近論に対しては，日本をナチス・ドイツの同盟国とみる立場から懐疑的な姿勢を保持していた。[13)]

II　壮年時代（1942～1965年）

イワ『自伝』は，日本軍政期（1942年3月～1945年8月）から1956年の国防相辞任までの時期に全記述の60パーセントがあてられている。年齢でいえば43歳～57歳までのこの壮年期前半は，「インドネシア」という独立主権国家を模索しつづけたイワにとって，その理想の実現，二度の閣僚体験（初代スカルノ内閣の社会相，アリ・サストロアミジョヨ内閣の国防相），そして1946年「7月3日事件」に関連しての二年余の獄中生活，軍の圧力による国防相辞任等いわばヒカリとヤミが交錯する激動の時代であった。

12）この点の詳細については後藤［1986：8章］を参照。

13）タムリンら「親日」的とみなされた民族主義者と日本との関係については後藤［1986：11章］に詳しい。

1．日本占領期評価

本章では，共和国の創成期に関わる起伏の多いイワの政治的軌跡の内とりわけ彼の国防相時代の役割に焦点をあてることによって，「シビリアン」イワの政軍関係観を考察してみたい。またそれに先立ち，イワの軍部認識との関連で，彼の日本軍政理解の一端についても言及しておきたい。

約三年半に及ぶ日本軍政期における「戦前派」の民族主義指導者の対応は，三つの類型に大別できる。第一はスカルノ，ハッタの最高指導者に代表されるように，「対日協力」を通じて独立の諸条件を手に入れる方途を選んだものである。日本軍政当局もオランダ植民地政府の下で流刑，投獄されていたスカルノら影響力ある指導者を積極的に利用して軍政の諸目的を達成しようとしたが，その意味でこの両者の「蜜月」はいわば同床異夢の関係であった。第二は今次大戦を「民主主義対ファシズム」の角逐と捉え，日本軍とは公的にも私的にも関わりを持たず，来たるべき日本敗北の日に備え「同志的ネットワーク」の組織化にあたっていたシャフリルに代表されるグループである。[14]

そして第三の範型が，ジャワにおける権力集団たる日本陸軍および軍政監部とは公的関わりを持たなかったものの，ジャカルタに設置された海軍武官府と密接な接触をもったグループである。前田精大佐（後少将）を長とする武官府とインドネシア独立との関係については先行の諸研究や関係者の回想録等に詳しいが，[15] ここで調査部分室長となったアフマッド・スバルジョとの個人的関係で，上述の第一，第二のグループに属さない多くの民族主義者が武官府と関わりを持つことになった。

スバルジョは1920年代の大半をライデン大学法学部学生として過ごし留学生会の重鎮の一人であったが，帰国後1935～1936年にはスマランの『マタハリ Matahari』紙通信員として滞日し，日本の「アジア主義」的南進論の高揚を間近に観察するなど特異な民族主義者として知られていた。[16] かつスバルジョは，「インドネシアの民族運動と日本のアジア主義運動のあいだには，インドネシア人民がオランダ植民地主義から離脱することを容易にする共通点があった」[スバルジョ 1973：9–10] との言説が示すように，きわめて日本への親近感の強い知識人であった。イワ自身はスバルジョのような積極的な日本観は持ち合わせていなかったものの，20年余にわたる彼との個人的関係から「海軍グループ」の一員となり，前田やその部下である西

14）このグループとは直接の関係はなかったが，アミル・シャリフディン Amir Sjarifuddin の場合は，蘭印政庁の「反日工作」と関わりをもって地下活動を行なおうとした数少ない民族主義者の一人である。

15）代表的な著作として早稲田大学大隈記念社会科学研究所［1959］，西嶋［1975］等。

16）Anderson［1972：442］は，スバルジョの訪日をイワ・クスマ・スマントリが主宰した *Matahari* 紙の派遣としているが，これは誤りである。同紙はスマランの黄仲涵財閥系の新聞であり，またスバルジョが日本に滞在した1935–36年は，イワは流刑中である。

嶋重忠らインドネシア民族主義に共鳴を覚える日本人との接触を深めていく。

このように相対的には自由な立場にあったイワは，それではインドネシア史における日本軍占領期をどのように位置づけているのであろうか。『自伝』においてイワは，日本軍政当局による厳しい政治的抑圧，経済的搾取，さらにはロームシャ（労務者）や従軍慰安婦の徴発等を生々しく記述する。それと同時に，この時代がもたらした反面教師的性格について「インドネシア民族に数多くの悲劇をひき起した日本軍の残酷で強圧的で厳しい植民地支配は，私たちの民族に積極的な感情をも植えつけた……日本軍政下の苛酷な生活を通して，インドネシア民族は，自力でやり遂げる自助を学んだ。私たちの民族の性格が，あらゆる植民地支配の苦しみを経験してゆく中で変化したのだった」［イワ 1975：104］と回顧する。1950年代以降の国際的なインドネシア研究学界において，日本軍政期は「史的分水嶺」であるとの理解が定着しつつあるが，[17] その時代の直接体験者の一人であるイワの歴史認識からもその点を確認することが可能である。

その一方，イワは権力の担い手であった日本の陸軍には強い異和感を覚えていた。社会主義をふくむ近代西欧のさまざまな政治思想に接し，それを骨肉化していた知識人イワにとっては，日本軍の強圧的で唯我独尊的な統治スタイルは到底受け入れがたいものであった。後述する1950年代半ばの国防相時代に彼が陸軍参謀次長ズルキフリ・ルビス Zulkifuli Lubis と対立した時，日本軍教育（ジャワ郷土防衛義勇軍，ペタ）の最優等生といわれたルビスに抱いた次のような感情からも，彼の日本軍観の一端を垣間見ることができる。「（ルビスの）陸軍は独立と革命に大きな貢献をしたのであるから，インドネシア共和国に政治的安定をつくり出す担い手は陸軍でなければならない，との一面的で狂信的な彼の情勢分析の方法は，かつて，インドネシア人の目にした日本軍部の狂信主義的な行動をインドネシア内部にも引き起すことになるものであり，そのルビスのような見解は，インドネシア陸軍自体にとって，きわめて危険な主張であると言ってよかった」［同上書：279–280］（傍点―引用者）。即ちルビス参謀次長に体現されているとみなした自国の陸軍の悪しき体質を「産みの親」でもある日本陸軍と重ね合わせて理解するのであった。

2．国軍問題

イワは，1950年代約10年間の「議会制民主主義」期を通じ最も長期政権であった第一次アリ・サストロアミジョヨ内閣（1953年7月～1955年6月）の国防相に就任するが，それ以前から，国防問題全般につき国会で積極的な発言を繰り返し表明していた。

たとえば1952年の国会での一演説において，イワは国防政策全体についての基本的見解を

17） この点に関する研究史については，後藤［1989：序章］，倉沢［1992：序章］を参照。

述べ，独立主権国家インドネシアが自らの主権を守るには，「内政，外交，国防の三位一体化」が必要だと強調した［DPR 1952：279–280］。第一の内政に関しては，何よりも外国からの破壊的な干渉（50年代初頭には親蘭派勢力による反政府運動が多発していたという状況を背景にしている—筆者）を拒否し人民の主権，安全，繁栄を保護すること，第二の外交に関しては恒久平和の実現を目指し自由・積極外交を展開すること，具体的には冷戦下にあって米ソいずれの陣営にも組さず，近隣の大国である中国，日本，オーストラリアとの間に相互不可侵条約を締結することが強調された。（1948年9月，副大統領ハッタが唱えた自由・積極外交という理念が，[18] ほぼ国民的合意を得ていたということは重要である—筆者。）そして第三の国防については，インドネシアの戦略的重要性を考慮しつつ，何よりも敵の侵略を防ぐに足るだけの十分な軍事力を備えることの必要性が説かれている。

こうしたイワのいわば総合安全保障政策的な国防観の底流には，国防とは特定の機関の専断に委ねられるべき課題ではなく，あくまでも国民全体，具体的には人民の主権が代表されている国会の場で十分に論議されるべきだとの信条があった。約言すれば，そこには文官優位（シビリアン・コントロール）の原則に対するイワの確固たる信念があった。さらにイワは，インドネシア共和国は世界最大の群島国家であり，国防政策の策定に際しては，これまで独立戦争への貢献を理由に過度に評価されてきた陸軍に比べ，軍事予算面はじめあらゆる分野で冷遇されてきた海軍と空軍の充実をはかることが急務であると説いた［*ibid.*：3068］。こうしたイワの国防論は，文官優位の原則を否定した上で成立している現下のスハルト Suharto 政権の国防基本方針である「ワワサン・ヌサンタラ Wawasan Nusantara」（陸，空，海および全天然資源を一つの統一体とみなし，それを護持することによってインドネシア民族の一体化は維持できるとの考え方）［CSIS 1991：Preface］と類似しているのは歴史の皮肉といえよう。

イワは，国防相任命直前の翌1953年5月の国会演説においても次のような個別的な問題提起を行なっている。（1）インドネシア共和国は群島国家である。（2）インドネシア共和国の議会ならびに政府は，海ならびに空の重要性を認識し，わが国の地理的条件に合致した海洋・航空ビジョンと，それに基づく国防政策を策定しなければならない。（3）政府ならびに議会は，国防基本法を早急に制定する必要がある。（4）インドネシア共和国の地理的状況に鑑み，海軍と空軍の充実をはからねばならない。（5）陸海空三軍の基本戦略は，国防審議会（デワン・プルタハナン・ネガラ）のような政府直轄の機関によって決定されなければならない。（6）国防省を陸軍省と海軍・空軍省の二省に分割すべきである。海軍・空軍省内部では，各軍は互いに他からの干渉を受けることなく，自立性をもち各々の予算に基づいて整備拡張されねばならない［DPR 1953：2991］。

国防政策全般に関するこのような具体的かつ積極的な提言がイワの国防相就任を可能にした

18）ハッタの外交論については，Hatta［1953］が最も体系的である。

ともいえるが，文民政治家（シビリアン）イワのこの国会演説はとりわけ次の二点を強調したものであったことは想起されるべきであろう。第一は，さきにも指摘したように，国防の基本政策は国軍によってではなく，政府と国会，即ちイワが人民の主権が体現されているとみなした機関によって審議され決定されるべきだということ，第二は，海軍，空軍を陸軍の支配から分離し，独立した一省の管轄下に移そうとしたことである。従来インドネシアの陸海空三軍は，一括して国防省の管轄下におかれ，その三軍に対する実質的な指揮権（国軍参謀総長職）は，例外なしに陸軍出身者，それも旧蘭印軍系のエリート将校の掌中にあった。

こうした実情に対し，イワは，三軍の間には，基本的な任務の差異があることを理由に，陸軍の影響力を相対的に低めようと考えたのであった。イワによれば，海軍，空軍は，戦時に敵国からの第一波の攻撃を受けてたつ防衛機能をもつのに対し，陸軍は地上作戦を主とするものである。したがって，そうした第二次的な陸軍を本来的機能を果す以上に増強することは，インドネシアが国境を越えた地域で戦争する，即ち攻撃型軍隊をもつようになることを意味し［*loc. cit.*］，それはインドネシアの国防理念である“自主防衛”論に反すると，イワはみなした。

このようにみてくると，1953年7月の国防相就任までのイワは，国軍問題に対しては，（1）国軍は独立戦争期にはきわめて重要な役割を演じたものの，戦争状態が終結し独立国家となった時点では，人民の主権を代表する政府と国会に服属するものである。換言すれば国軍の基本的性格は“国家の道具（アラット・ネガラ）”であり，文官優位の原則が貫徹されなければならない，（2）国軍のなかでも最強を誇る陸軍のなかで，旧蘭印軍系のグループが勢力を強めることはオランダの影響力の増大を意味し，これは何としても回避しなければならない，（3）かといって，陸軍内のもう一方の勢力である旧義勇軍系の勢力を量的に拡張してゆくことは，インドネシアの戦略的，地理的条件に鑑み賢明な策とはいえない，むしろ（4）海軍，空軍力を充実させることが，外交原則である自由積極外交を推進する足場を固め，他国からの攻撃の脅威を抑止するという国防原則からみても重要である，という基本的な理解を抱いていたといえよう。

インドネシアの政治情勢は，1952年「10月17日事件」[19] に端を発した国軍問題をめぐる政治的緊張の高まりのなかでウィロポ Wilopo 内閣は退陣を余儀なくされ，それに代って，第一次アリ・サストロアミジョヨ内閣が誕生した。当然のことながら，アリ内閣においては国防相のポストがきわめて重要なものとなり，その人事が注目の的となった。そして紆余曲折を経た後，アリ首相の所属するインドネシア国民党の左派と人間的にも政治的にも太いパイプで結ばれ，また国軍問題にも一家言をもち，かつ，「10月17日事件」をひき起した旧蘭印軍系将校に批判的で，国軍内の旧義勇軍系グループの支持もあったイワが，その重責を担うことになった。

19）この事件の詳細については，Feith［1962：246-273］を参照。また日本語文献として 永井［1986：176-184］がある。

国防政策策定の実質的な最高責任者となったイワは，彼の政策の重点を，国軍とりわけ陸軍内部の軍規と軍の統制の回復に置くことを強調［イワ 1975：269–272］しつつ，議員時代の構想を実行に移すべく2年間の在任中，相当に大胆な施策を打ち出し，国防政策にある程度のフリー・ハンドをもつことになった。もちろん，こうした積極的な国防政策を可能にした背景には，まず何よりも国軍とりわけ陸軍の内部が「10月17日事件」により内部分裂をおこし，文官たるイワが，その軍内亀裂にくさびを打ち込む形で人事政策その他の重要施策を強行できたという政治的条件があったことは否めない。また，そうした国軍の一般的な影響力の低下という事実そのものが，第一次アリ内閣をして，1950年代のインドネシア共和国の「議会制民主主義」期にもっとも長命内閣たらしめた一因でもあった。したがって，当時の政治過程を克明に観察したH. フィース Feith がいみじくも指摘したように，アリ内閣が政権担当中に何よりも恐れたことは，まず第一に国軍内の親スカルノ系＝「10月17日事件」に反対の旧義勇軍系の勢力が弱体化することであり，そして，第二に軍内の対立が和解の方向にむかうということであった［Feith 1962：395］。

イワの主導権により決定した幾つかの重要な政策，とりわけ，前ウィロポ内閣時代からの懸案であった国防法の制定，あるいは旧蘭印軍系のエリート将校の牙城であった国軍参謀総長制の廃止，さらには「10月17日事件」反対の急先鋒の一人であったZ. ルビス大佐の陸軍参謀次長への任命等は，まさに前述した軍内の権力構造，あるいは政・軍関係の文脈のなかでとられたものであった。しかしながら，「軍人は軍紀にもとる態度と行為をなすことを許されず，政治に参加することを許されない」（第27条）ことを規定した国防法に象徴的にみられるような，あからさまな「文官優位の原則」，あるいは「国軍は国家の道具」であると考えるイワの基本的な国軍観は，従来，独立戦争期の体験から「国家と人民の保護者」をもって任じ，それ故に，国軍は軍事面だけでなく，政治社会面でも貢献すべきだとの立場から「文官優位の原則」には異を唱えていた国軍をいたく刺激することになった。

またイワは，左翼の復員軍人団体（PERBEPBSI）が，ダルル・イスラム運動に対抗すべく彼らに武器を供与してほしいと要望した時これに好意的な返答を与えたことが，軍や野党からの「赤いイワ」批判を招来することとなった。その結果，イワ国防相への不信をテコとして，軍内に「10月17日事件」の傷跡をいやし，ふたたび統一を回復しようとする気運を助長することになった。このようにして，第一義的には，文官政治家イワへの対抗を契機として高まった軍内和解の動きは，1955年2月ジョクジャカルタで開催された全陸軍指導者による陸軍高級士官会同により，一層明確なものとなっていった。

このようにみてくると，1953年7月から1955年8月にかけて政権を担当した第一次アリ内閣は，国軍「機関」説を暗黙の原則として対軍関係においては幸先のよい船出をしたものの，結局は，その航海半ばに「当初の予測」［イワ 1975：271］に反して覚醒した国軍という「眠れ

る獅子」に「二重機能」論で武装させる（具体的にはジョクジャカルタ会同における「サプタ・マルガ Sapta Marga 憲章」の採択）主要な契機を与えた内閣として，インドネシア憲政史上に位置づけることも可能である。また1950年代当初より戒厳令の鬼子的性格をいち早く察知しそれにたいする批判を表明し，[20] また国防相在任中は大胆な国軍「機関」説を主張してやまなかったイワは，自らの政策のいわばブーメラン的帰結として，国軍再統一への動きを招来する一因をつくったものともいえよう。

3．ナショナリズムとエスニシティ

上述した政軍関係の中で，イワは大同団結をはたした陸軍の圧力に屈した形で，1955年6月国防相辞任を余儀なくされた。国政レベルでの要職をひとまず離れ50歳代後半を迎えていたイワの関心を捉えたのは，独立達成後10年いまだ政治的騒擾がおさまらず社会経済的にも不安定な地方社会の状況であった。1910年代後半以来ナショナルな価値を目指し闘争（ブルショアン）してきたイワにとって，ナショナルな場で心理的痛手を受けたことも，彼が故地スンダ社会の現実に関心を向けることになった要因の一つであった。

その当時，西部ジャワ，プリアンガン地方一帯は依然としてダルル・イスラム運動の脅威に日常的にさらされ，著しく不安定な社会経済情勢下にあった［アイップ 1990：108–115］。また中央における「安定政権」を産む契機となることを期待された1955年の第一回総選挙が，結果的には社会の末端部にまで党派政治を激化させ，かえって政治の流動化を助長することになった。そうした時代背景の下で，スンダ社会の一部には中央政府を支配しているとみなしたジャワ人への「伝統的」な反発も加わり，より広範な地方自治を要求する“スンダ主義”的な動きが表面化した。こうした事態を国家の統一と独立に対する脅威と憂慮したイワは，1956年5月，翌年中央政府の首相となるジュアンダ Djuanda ら国政レベルで影響力をもち，同時に（またある意味ではそれ故に）スンダ社会で声望の高い指導者と語らい，既存のスンダ諸団体の活動を統合，調整すべく，スンダ協議会（バダン・ムシャワラ・スンダ）を発足させた［後藤 1972：34–35］。

イワはこのスンダ協議会の委員長に推されることになるが，『自伝』の中でこの協議会の性格，そして多様なエスニック集団から構成されるインドネシアの統一についてこう記している。

このスンダ協議会は，種族独善主義の感情を強調したり，自省至上主義の目標を追究しよ

20）当時施行されていた1950年憲法第142条は，従来有効であったすべての法律，条令は新たな廃止措置がとられるまで効力を発揮するとの一項があった。そのため1939年に蘭印政庁が発布した戒厳令も自動的に効力をもつものと多くの国軍指導者は考えていた。イワはこうした戒厳令が軍部により恣意的に利用されることを厳しく指摘していた（［DPR 1952：1372］他）。

うとするものではなかった。インドネシア民族が，独自の習慣，言語，文化を持つ幾つかの種族から成っていることは，否定しがたい事実である。インドネシア民族は，民族統一をめざして団結しなければならないと同時に，……各地方種族のもつ「特殊な財産」を維持し，発展させてゆかなければならない。私たちの考えによれば，各種族の願望と威信が各面で尊重されてゆくならば，インドネシア共和国はさらに強力になり，しっかりした基礎をもつ国家になるはずであった。そのことは，インドネシアが豊かな文化と言語をもった民族であることを証明するものである。[イワ 1975：301-302]

このような基本的視座をもつスンダ人にしてナショナリストのイワは，一部のスンダ至上主義者の唱えた感情的な反中央姿勢，反ジャワ論を宥めつつ，中央政府との平和的な話し合いを通じ，各地方社会の要求を実現すべきことを説いた。しかしながら，そうしたイワら長老派の説得にもかかわらず，同年8月，スンダ協議会への加盟を拒否し急進的な反中央（かつ反ジャワ）的立場を掲げたスンダ青年戦線（フロント・プムダ・スンダ）の活動家が，反スカルノ大統領，反インドネシア国民党，反「ジャワ族膨張主義」を煽る小冊子を広く配布し大きな政治問題化した。こうした事態は，当然のことながらイワらスンダ協議会の穏健派の指導者を苦境に追い込むことになった。[21)]

西部ジャワでは，このスンダ青年戦線の提起した問題をめぐり激しい論争が展開されたが，その論争は三つに大別できる。第一は，青年戦線の主張に賛同し，積極的に評価するグループである。この立場を代表したのは前述した戦前のパグユバン・パスンダンの系譜につながるパルキ Parki（インドネシア民族党，1949年成立）の議長 R. S. スラディレジャ Suradiredja である。スンダ社会に基盤を置きながらも，党名にインドネシアを冠したことが示すように，パルキは1949年の連邦共和国体制を単一共和国制に移行（1950年8月）させる上で，西ジャワで中心的な役割を演じていた［Kementerian Penerangan 1954：240］。それにもかかわらず「独立の熱気（エラン）」が退潮をみせる1950年代半ばになると，パルキは急激にスンダ・アイデンティティへの回帰を強めるようになった。そのことが次のようなスラディレジャ発言の背景にあったと考えられる。

スンダ族の現状と将来を憂慮するものは何人といえども青年たちの訴えにひかれるであろう。……ただ不幸にしてかれらの提起の仕方はあまりに乱暴であった……西部ジャワ各層の主要なポストは，スンダ族に代わってジャワ族が占めている兆候があるというのは事実である。[後藤 1972：34]

21）この時期のスンダ政治社会の実情を分析した研究はきわめて少ないが，Wangsamihardja［1972］はスンダ協議会の事務局長の手になるもので示唆的である。

第二のグループは，スンダ青年戦線の本質的には反ジャワ的な運動は，インドネシア国民を分裂させ，種族間の対立を助長し，かつ共和国の基礎を脅かす破壊活動であると真正面から非難した。この立場は，西ジャワ州の議会指導者 A. アストラウィナタ Astrawinata と G. ウィラマントリ Wiramantri の名で出された声明に代表される。

このようなスンダ社会に深刻な亀裂をもたらしかねない危機の深化を未然に防いだのが，イワら中央でも信頼度の高い長老指導者に率いられた第三グループともいうべきスンダ協議会であった。たとえばジュアンダは，「地方文化——初等教育，特別訓練において使用される言語の問題を含めて——は地方的必要に応じて発展されるべきである。しかしながら，国際関係において，インドネシアは，すべての面において，中央政府によって代表される一体性を形成するものであるということを，各地方も中央政府も，ともに銘記すべきである」と説くのであった。[22)]

結局，この小冊子事件は政治的には大事には至らなかったものの，事件の余波を受けたイワは，スンダ青年戦線との背後関係を疑われ一時軍当局により逮捕されるという体験も味わった。結果的には潔白がすぐに判明したとはいえ，共和国政府の中枢を離れた直後のこの逮捕は，スンダ協議会自体の活動停止と相俟って 57 歳という初老期を迎えつつあったイワにとっては，中央と地方のあるべき形を模索する上で重要な転機となったと思われる。

この問題について当時のイワの考えを最も明快に示しているのが，1957 年に執筆された『新憲法論』である。この著作において，イワは彼がつねに拠り所としてきた 1945 年憲法の「インドネシア共和国は共和制をとる単一国家（ネガラ・クサトゥアン）」であるという第 1 条第 1 項の「単一」という語を再検討し，共和国の新しい国家形態を模索しようとした。即ちここでイワは，各地の種族社会が独自の文化を開花させ社会経済的基盤を確立すること，換言すれば「種族としての一体性（クサトゥアン・スクバンサ）」を強めれば強めるほど，「全インドネシア民族の団結（プルサトゥアン・スルル・バンサ・インドネシア）」はより強固になるとの考えを展開したのであった [Iwa 1958 : 16–18]。その意味でイワは，インドネシア共和国の国家形態として，45 年憲法（および 50 年憲法）の規定する「単一国家（ネガラ・クサトゥアン）」ではなく，またハーグ円卓協定の副産物である 49 年憲法の定める「連邦国家」でもない，その両者の中間的な形態概念ともいうべき「団結国家（ネガラ・プルサトゥアン）」という第三の可能性を展望していたようにも見受けられる。

このようなイワの「団結国家」論の文脈を理解するならば，彼が国防相辞任後，一見急転したかのごとく地方問題に取り組むことになったのは，彼が「45 年憲法の基本理念」を否定し，そこから逸脱していったからではないことは明白である。それどころかイワは，地方の種族社会の運動には「反動的」なものと「革命的」なものの二種類あり，「団結国家（ネガラ・プルサトゥアン）」を実現しようとする意味での「革命的」な地方運動の中には「独立宣言の精神と理念を誠実に呼び戻そう」

22) *Pedoman*, 29 Oktober 1956.

とするものがあるとまで明言していることは，きわめて興味深い事実である［Iwa 1968：17］。

またこの『新憲法論』初版の刊行とほぼ同じ1957年末，イワらスンダ知識階級の中央政府への働きかけによって，バンドンに国立パジャジャラン大学が設立された。イワ自らが初代総長に就任することになったが，こうした中にもスンダ的なアイデンティティとインドネシアへの帰属感は両立可能であるとするイワの認識方法の一端をみることができる。しかも，イワの総長在任中，パジャジャラン大学はチトー Tito・ユーゴスラビア連邦共和国大統領，ホー・チ・ミン Ho Chi Minh ベトナム民主共和国大統領，アフリカの解放運動指導者 M. ケリナ，そしてインドネシアの建軍の父 A. H. ナスティオン Nasution 将軍，および初代インドネシア共産党委員長セマウンに名誉博士号を授与しているが［イワ 1975：325］，ここにもスンダの母なる都に建学した大学を基盤に広くナショナルなるもの，インターナショナルなるものの共存を模索したイワの真骨頂をみることも可能である。

む す び

各地の種族社会がその社会的文化的個性を開花させることによって，インドネシア民族の凝集性が高まりかつ国民国家の枠が強化されようと展望してからほぼ10年を経た1968年，イワは『新憲法論』の第二版を刊行した。

当時のインドネシアでは，「9月30日事件」を契機にスカルノ大統領が失脚し，スハルト将軍の下で軍部主導の政治体制が確立しつつあった。そこでは強力な大統領制を規定した45年憲法のより一層の強化が謳われ，その憲法下での「政治的安定」，「開発優先」が最重点課題とされた。端的にいうならば，そこではかつてイワが繰り返し説いた国軍＝「国家機関」説は事実上葬り去られたのみならず，彼が拒否した国軍への権力集中が「二重機能」論の名の下に正統的イデオロギーとなりつつあった。

このような内向きのナショナリズムが強まる時代状況の中で，第一線を退いたイワは新『新憲法論』において大統領に強大な権限を付与する45年憲法は植民地主義と対決し独立を達成する過程では有効であったが，今日的状況の中では必ずしも適切とはいえないのではないか，と注意深い筆致で指摘するようになった。そしてその最大の論拠としてイワは，45年憲法では「人民の基本的な諸権利の保証」に関する規定が著しく欠如していると指摘するのであった。この著作から3年後イワは死去することになるが，「政治的遺言」ともいうべきこの45年憲法見直し論，そしてさらには前述のエスニシティとナショナリティの関係をめぐる言説は，独立後50年そしてスハルト政権発足30年を迎えた今日，今なお含蓄深い政治的，文化的意味合いを有したものといえる。

和文参考文献

アイップ・ロシディ．1990.『祖国の子へ——未明の手紙』舟知恵（訳）．東京：踏青社．（原著 Ajip Rosidi. *Anak Tanahair-secerah Kisah.* Jakarta : Gramedia. 1985.）
後藤乾一．1972.「インドネシアの地方政治——西部ジャワの事例——」『アジア経済』13(6).
_____．1986.『昭和期日本とインドネシア』東京：勁草書房．
_____．1989.『日本占領期インドネシア研究』東京：龍溪書舎．
ハッタ，モハマッド．1993.『ハッタ回想録』大谷正彦（訳）．東京：めこん．（原著 Hatta, Mohammad. *Memoir Moh. Hatta.* Jakarta : Tintamas. 1982.）
イワ・クスマ・スマントリ．1975.『インドネシア民族主義の源流——イワ・クスマ・スマントリ自伝』後藤乾一（訳）．東京：早稲田大学出版部．（原著 Iwa Kusuma Sumantri. *Autobiography dari Prof. Iwa Kusuma Sumantri.* Jakarta (stencil). 1971.）
倉沢愛子．1992.『日本占領下のジャワ農村の変容』東京：草思社．
増田　与．1971.『インドネシア現代史』東京：中央公論社．
永井重信．1986.『インドネシア現代政治史』東京：勁草書房．
永積　昭．1980.『インドネシア民族意識の形成』東京：東京大学出版会．
永積　昭　解説（鈴木恒之・神谷種正・弘末雅士訳）．1979.「ダニエル＝カム訊問調書——インドネシア共産党員のモスクワ留学関係史料」『アジア研究』26（2）．
西嶋重忠．1975.『証言インドネシア独立革命——ある日本人革命家の半生——』東京：新人物往来社．
スバルジョ，アフマッド．1973.『インドネシアの独立と革命』奥　源造（編訳）．東京：龍溪書舎．（原著 Subardjo, Ahmad. *Lahirnya Republik Indonesia.* Jakarta : P. T. Kinta. 1972.）
田中則雄．1972.「スンダ（西ジャワ）の貴族（menak）について」『東南アジア研究』10(3).
土屋健治．1982.『インドネシア民族主義研究』東京：創文社．
_____（編）．1990.『東南アジアの思想』（講座・東南アジア学第6巻）東京：弘文堂．
早稲田大学大隈記念社会科学研究所（編）．1959.『インドネシアにおける日本軍政の研究』東京：紀伊國屋書店．

外国語文献

Anderson, R. O'G. 1972. *Java in a Time of Revolution Occupation and Resistance 1944–1946.* Ithaca : Cornell University Press.
Center for Strategic and International Studies (CSIS). 1991. Wawasan Nusantara. Jakarta.
Dewan Perwakilan Rakyat (DPR). 1951, 1952, 1953. *Risalah Perundingan.* Jakarta.
Feith, Herbert. 1962. *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia.* Ithaca : Cornell University Press.
Hatta, Mohammad. 1953. *Kumpulan Karangan.* Jakarta : Penerbitan Balai Buku Indonesia.
Iwa Kusuma Sumantri. 1958, 1968. *Kearah Perumusan Konstitusi Baru.* Jakarta : Penerbitan Universitas.
Kementerian Penerangan Republik Indonesia. 1954. *Kepartaian dan Parlementaria Indonesia.* Jakarta : Pustaka Rakyat.
McVey, Ruth T. 1965. *The Rise of Indonesian Communism.* Ithaca : Cornell University Press.
Mrázek, Rudolf. 1994. *Sjahrir Politics and Exile in Indonesia.* Ithaca : Southeast Asia Program, Cornell University.
Nagazumi, Akira. 1972. *The Dawn of Indonesian Nationalism, the Early Years of Budi Utomo 1908–18.* Tokyo : Inst. of Developing Economies.
Pringgodigdo, A. K. 1949. *Sejarah Pergerakan Rakyat Indonesia.* Jakarta : Pustaka Rakyat.
Sjahrir, Soetan. 1949. *Out of Exile.* Translated by Wolf, Charles Jr. NY : John Day.
Sudijono Djojoprajitno. 1962. *PKI–Sibar Contra Tan Malaka.* Jakarta : Yayasan Massa.
Tan Malaka. 1947. *Dari Penjara ke Penjara* (III). Jakarta : Wijaya.
Wangsamihardja, R. Atoeng. 1972. *Sejarah Singkat Pasundan* (stencil).